

安楽寺だより

第63号

第22回 「諸行無常」

しょうぎょうむじょう

お釈迦さまは、六年に及ぶ苦行のご修行そして菩提樹のもとで瞑想修行の後、『諸行無常』の真理を悟られました。諸行の『行』とは、自分を取りまく身と心のすべて、あらゆる現象のことをいいます。



言葉を変えれば、因縁によって成立した一切の現象世界を意味します。諸行は絶え間なく変化しながら連続しており、無常であるというものが、真理なのがあります。

紙面内容

- 2面 春季永代経勤める(榊野明仁師)
- 3面 若院 東別院で定例法話
- 4面 暮らしの中の仏教語(世間)

あらゆる現象には、もともと生・住・異・滅という要素が含まれています。「生」とは生まれる・生ずること、「住」とは一応一定していて、安定していること、「異」とは変化が起こること、そして「滅」とは滅んでいくこと、あらゆる現象には、こうした四つの要素を持っているのです。

人間に例えれば、生まれて来て成長します。しばらくは安定した状態を保って成長していきます。それから変化がおこります。耳が遠くなったとか、足腰が弱くなったとか、目が見えにくくなったとか色々な変化が起こります。やがて滅んでいく、必ず死ぬのです。生まれたということは、例外なく死が訪れるのです。常住でない、恒久でない、不変でない、不滅でないことを「無常」といいます。無常に基づく「生老病死」などの苦は、他者が襲いかかってくるのではなく、自らの存在が自らに引きよせてい

昔から日本人は無常ということを非常に強く受け止めています。「祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす 驕れるもの久しからず・・・」(平家物語) 生と死はひとつの出来事です。別々に切り離すわけにはいかないというのが仏教のものの見方です。

しかし、無常であるからこそ喜びや悲しみ、繁栄や衰退、愛や憎しみ、豊作や飢饉などがあります。季節の変化があり、草木は芽を出し、花は咲きます。晴れの日雨の日ばかりでも農作物は育ちません。無常とは、創造と破壊を繰り返しながら連続していることを言うのです。

『諸行無常』という言葉は、仏教の一番大切な教えのひとつと言えます。

あらゆる現象は生・住・異・滅という要素が含まれている

春季永代経勤める

聖徳太子の和の精神

五月十三日、朝から初夏を思わせるような天気の中、春季永代経をお勤めいたしました。本堂で読経いたす中、参詣されました皆様に焼香をしていただき、皆様とご一緒に正信偈をお勤め致しました。

その後柳野明仁師（西尾市本澄寺住職）に昨年に引き続き聖徳太子のご絵伝を四幅お掛けして絵解き法話をしていただきました。



「日本への仏教伝来は、朝鮮百済の聖明王から日本の朝廷に仏像（のちに長野善光寺の本尊となる）・経典を献上したとされる西暦五三八年と言われています。それから半世紀後の五九三年に聖徳太子は、推古天皇の摂政になられ、政治体制の整備に取り組まれました。

『以和為貴』（和を以って貴しと為す）の十七条の憲法発布、冠位十二階の制定がよく知られています。」

「聖徳太子は、奈良法隆寺を建立する前の五九三年に建てられた大阪四天王寺があります。金堂や極楽の東大門・五重塔のほか毎年四月二十二日に勤められる「聖霊会」では、それ以前聖徳太子といくさをした物部守屋の子孫が代表者を務められています。」

「永代経を勤めることは、阿弥陀さまの



安楽寺本堂に奉掛してあります聖徳太子のご絵像（庄司暁憲先生寄贈）

ご本願と参詣する皆様の願いが合致することであり、これを三昧定（さんまいじょう）と申します。」

「私は昨年三月、ニューヨークのコロンビア大学で聖徳太子ご絵伝の絵解き法話を行なってきました。

言葉や文化・宗教も全く違うキリスト教圏の人々に講和して思いました。今まで絵解き法話を始めて三十年、私は仏教徒の方にはしかお話ししてこなかったことに初めて気がつきました。」

「和の精神とは、転ばぬ先の杖ではありません。和とは、転んで初めて開かれてきた他力の文化、それをしっかり支えてきた大地がある。聖徳太子の和の精神・こころを受け継いできたのは、親鸞聖人の他力の教えであると思うのであります。」

東別院で法話

若院 吉田昌史



四月十五日、東別院に於いて定例法話をさせていただきました。今回は「自是他非（じぜたひ）」というテーマでお話しをさせていただきました。

自是他非とは「自らを是とし、他を非とする」これは「自分が正しくて、他人は間違っている」ことを言います。これは私たちの比べる心から生まれてきます。

仏教の考え方に「分別（ぶんべつ）無分別（むぶんべつ）」というお言葉があります。無分別の世界とは、阿弥陀様が開かれたお浄土の世界です。それに対して、私たちが生きている世界を分別のある世界といえます。世間一般には「分別のある人」を他人に気遣いが出来る人、場をわきまえて行動

無分別の世界から願われて

できる人を指しますが、仏教でいう分別とは「物事を自分勝手な物差しで区別・差別し、妄想や執着を生み出す迷いのところ」を意味します。

私と他人、損得、善悪といった様々なことを区別してしまうところを私たちは常に持ち合わせてしまっています。そのことで人を蔑（さげす）んだり、妬（ねた）んだり、時には後悔をして落ち込んだりしていないでしょうか。もちろん私たちは生きる上でたくさんの物事を選んでいかなければならないから、間違ったものを選ばないために勉強したり、経験を積み、正しく人生を歩みたいと私たちは考えます。ただ残念ながら分別のこころは苦しみを生んでしまいます。

その苦しい私たちに阿弥陀様は、無分別の世界より呼びかけてくださっているのが、『南無阿弥陀仏』であります。「苦しい身であるからこそあなたを救いたい」というお声であります。仏さまの教えに触れていくことは、こころの悩みや苦しみに自分自身が気付いていくこととです。日々のお言葉を大事にさせていただきながら仏法を聴聞する生活が送れたらと思っています。



佛佳会親睦旅行に行きました



四月九日、今年も日帰り旅行で長野県伊那市にあります高遠のさくら散策に行きました。雲が払がった日和でしたが、高遠町歴史博物館周辺にある高遠城址公園一帯に咲くタカトオヒガンザクラは、天下第一の桜といわれ、大勢の皆様で賑わっていました。

今年も天気にも恵まれて、大変ありがたい一日でした。ご参加いただいた皆様有難うございました。来年もいい旅行を企画する予定ですので、ぜひご参加をお待ちいたしております。

仏教豆知識

第六十三回



暮らしの中の仏教語

日頃は何気なく使っている言葉も語源や由来は、意外にわからないものです。

5、「世間」

私たちが日頃「世間」という言葉を使う時には、人びとが生活している「場」とその場に生きている「人びと」という二重の意味があります。

世間は大別して二つを表わしています。

一つは私たちを取り巻く自然環境で、生きとし生けるものが関係している器(器世間・きせけん)そして器世間に住む一切の生あるものの世界ですから衆生世間といえます。世間の原語は、インドで「Loka ローカ」開放された空間を表わし、中国で世間と翻訳されました。

「世間は狭い」「世間体」とか「世間ばなし」など人間社会のことに限定されて使われることが多いようです。

聖徳太子のお言葉に『世間虚仮・唯仏是真』(世間のことはいつわりで、ただ仏国土のみ真である)と仰せられました。親鸞聖人は、『煩惱具足の凡夫、家宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします』と述べておられます。

私たちは、真実よりも自分の考えに固執し、わが身の事実をありのまま受けとめず生きようとします。仏さまは、私たちに世間を見通す視点を与えてくださっています。それがお念仏の教えなのです。

生まれ育った国が違えば 社会観も違う



「あまたの人々の命を奪った沖縄戦の悲惨さを共有し、二度と愚かな行為を繰り返してはならない。(今)遠い国の戦争でさえも暮らしに影響する現状に対し、あらゆる戦争に反対すること、平和を実現することは、単なる理想ではなく(私たちに)取り組むべき責任が求められている。戦争体験を受け継ぐ沖縄こそが平和に貢献できると信じ、世界の人々と共にその役割を果たすことを誓う」(英文翻訳)

6月23日、沖縄慰霊の日に、玉城沖縄県知事は、平和宣言で表明されました。▼8月15日の終戦の日に続く日本人の第二次大戦への追憶は、決して忘れてはならない。八十年前の日本の現実として全国民一人ひとりに呼びかけられていると受け止めました。